

森の紙芝居部門 中学生の部 入選（審査委員長賞）

「森からのSOS」 作：山川・野口・金本



「また失敗しちゃった。もうい～らない！」  
 桜ちゃんとかえでちゃんは、2人で仲良くお絵描きをしていました。  
 けれど、失敗して紙を捨ててしまいました。  
 すると、遠くから声が聞こえてきました。  
 「紙を無駄にしないで！」  
 「えっ。誰？」



「私は、森の妖精君たちが捨てた紙から出てきたんだ。」  
 なんで、ここにいるの？紙と木って関係ないじゃん。」  
 すると、森の妖精は、言いました。  
 「関係あるよ！こっちにおいで！」



桜ちゃんとかえでちゃんは、森の妖精に連れられて、  
 どこかに行ってしまいました。  
 「ここはどこ？」  
 「森の中だよ！」  
 「うわぁ！広いね！」  
 すると森の妖精は、少し寂しそうに言いました。「うん。でも、この森も無くなってしまうかもしれないんだ。」  
 「えっ？どうして？」



「それはね、今地球では木がいっぱい無くなっているんだ。」  
 「そうなの？なんで！」



すると、リスがやって来て話をしてくれました。  
 「それはね。大きな建物を造ったり、あなたたちに使われている物を作るために木が切られているからよ。そのせいで私たちリスや鳥の住む所が無くなってるのよ。」  
 「そうなんだぁ～。」  
 すると森の妖精が言いました。



「森が無くなると、君達も困ってしまうんだよ。」  
 「えっ！」  
 「木は君達が出している二酸化炭素を吸ってくれて、それを酸素に変える働きをしているんだ。」  
 「へえ～。」  
 「けれど木が無くなると、二酸化炭素がどんどん増えて、地球温暖化が進んでしまうんだ。」  
 「えっ！それは大変！」



「地球温暖化が進むと、海面が上がってしまい海に沈んでしまう国もあるんだ。」  
「え～！ そうなの～」



そして、リスが言いました。  
「地球が暖まると地球上の氷が溶けてそこで、生活している動物が住めなくなってしまうのよ。」



「え～！ そんなに地球が大変なの！ じゃあ私たちはどうしたらいいの？」  
すると、森の妖精が言いました。



「少しのことで二酸化炭素は減らせられるんだよ。たとえば、割り箸をあまり使わないだったり、スーパーの袋を使わずにマイバックをつかうのもいいことなんだよ。」  
「へえ～ そんなことでも、地球温暖化が防げるんだあ～。」  
「さっき桜ちゃんとかえでちゃんが捨てた紙も無駄使いすると、地球温暖化の原因となるんだよ。」 「そうだったんだあ～」



桜ちゃんとかえでちゃんは、反省しました。  
「そんなに落ち込まなくても大丈夫だよ！」  
「今からでも遅くないんだよ。」  
「えっ！ 本当？」  
「うん。本当だよ。」  
森の妖精は、続けて言いました。  
「今からでも遅くはないから2人ともがんばって森を守ってね。」  
「うん！」  
「じゃあ町へ帰ろっか。2人とも元気だね。」  
「えっ！？ 森の妖精さん達は一緒に帰らないの？」  
「うん。でも大丈夫！ 私やリスや森達は君達の事をずっと見守っているからね。」  
「分かった…。じゃあまた遊ぼうね！ バイバ～イ」



桜？ かえで～ こんな所で寝てちゃ風邪ひくわよ。」  
「あっ、ママ！ あれ？ ここは森じゃないの？」  
「なに言ってるの？ ここは、森じゃなくて家でしょ。何か夢でも見てたのかしら。」  
「うん…」  
桜ちゃんとかえでちゃんが、目覚めたのはさっきまで2人が絵をかいていたお家でした。  
「さっ、もうごはんにしましょう。今日は2人の好きなハンバーグよ。」  
「わ～い！」  
「あっ！ そうだ。2人ともちゃんと紙とクレヨン忘れないで片付けときなさいね。」  
「は～い。」  
2人は、絵をいっしょに見るとにっこりわらいました。  
その絵は森の妖精とリスとたくさんのお木が描かれており、その絵が2人を見守っているような絵でした。